

月の花挽歌 ～7. 時の過ぎ行くままに～

7-6

「二人が主演の映画に脇で出させてもらってね。今回が初めて一緒の仕事だったので、飯でも食べようかと話していたんだが、九月の終わりにクランクアップしたのに、今頃になって約束が果たせたってことさ」とTは言ってからコニャックの水割りを口に運んだ。

男優と横田は水割りを、女優と真紀はストレートで飲んだ。

真紀の話の進め方もあって、自ずと三人が出演した官能恋愛映画が話題になった。

「今年の春に私が初監督した映画が公開されたことはママも知っているよね」とTは真紀に言ってから、横田にも同意を促した。

高名な日本画家だった父を持つTの妻が絵画を購入してくれた縁で、時おり横田はTと飲食を共にするようになったが、映画界には疎い方なので相槌を打つことが精々だった。

「最近では監督を兼ねる俳優も多くなってきたが、いざやってみると大変は大変だけれども、作品が完成した時の充足感はたまらないね」とTは初監督作品の評価もまざまざだったこともあり満足げに言った。

「何と申しましても血筋ですから……」と真紀はTの祖父が日本映画の草分け的な監督だったことを念頭に相槌を打つ。

仕事関連の話には食傷気味だったけれど、このような形態の店は初体験の女優は、周りからの視線を感じないで寛げる『こはる』の雰囲気、一流クラブと呼ばれる格付けの一端を右脳で察知することで解消していた。

男優は真紀に興味をそそられたようで、上の空でTと対峙しているのが透けて見えた。

場の空気を百も承知のTは、それでもアフターディナーに場所替えしたことをいいことにして映画の話が続けた。

「実は映画作りの勉強がてらに、今度の映画のオールラッシュを観させてもらったんだ」

「オール何とかって、業界用語でおっしゃられても……」と真紀は直ぐに説明を求める。

「オールラッシュとは、撮影後のフィルムを台本通りに編集した試写会の事なんだ。主に製作スタッフが最終チェックする場で、出演者はまず観ることはないね」

「出来映えはいかがでしたでしょうか」と今の話が初耳だったこともあり、Tの評価が気になった女優はブランデーグラスを手のひらで揺らしながら尋ねた。

「あの作家の本が原作だから……、ま、あんなもんだろう。でもねー、濡れ場は良く撮れていたよ！」とTは先ほどまでの映画人的饒舌とは裏腹に、下世話な答えをする。